経営者リレーインタビュー PART2

わがまちのリーダーたち NO.31

有限会社和建築設計事務所
青木　和壽　社長

昭和38年生まれ。工学院大学建築学科卒業。北野建設勤務の後、一色建築設計事務所入社。取締役を務めた後、平成11年㈲和建築設計事務所設立。翌年塩尻市に事務所移転。信州の木材を使った家づくりやコンストラクションマネジメントに力を入れている。建築士グループ・アーキテクツデスク、信州の木マーケティングレップメンバー。

お会いする度に新しい課題に取組んでおられます。

前編　仕事は獲ってくるもんじゃない、創り出すもんだ！

今年の１月と２月、日本住宅・木材技術センター（東京都）他で信州カラマツ外壁サイディングの防火性能試験（国土交通省20年度地域木材住宅活性化推進事業、林野庁20年度住宅分野への地域材供給支援事業採択）の公開がありました。

主催しているのは㈲和建築設計事務所の青木社長。試験に先立ってお伺いした際、青木社長がおっしゃった言葉がとても印象的でした。“仕事は獲ってくるものではなく、創り出すものだ一”。

日頃、「獲ってくる営業」しかやっていない（獲れていませんが…汗）私にはとても新鮮でした。

●カラマツサイディング●

木製のサイディング（建物の外壁に貼る板、近年はセメント系やセラミック系のものが多い）で耐火構造・準耐火構造の認定を受けているものは既にありましたが、それらは全て薬剤処理されたものでした。薬剤処理がされたものは、その薬剤によってアルミサッシが腐食してしまったり、建物解体時の処分に困るといった問題がありました。また、薬剤注入には当然エネルギーが使われるので、その分CO_2の排出が増えることにもなります。

今回は薬剤処理を施さないで防火構造・準防火構造の認定を受けようというものです。ちなみに、これらの認定を受けなければ、都市計画上の防火・準防火地域で使用することはできないそうです。

試験当日は首都圏を中心としてたくさんの建築士さんがお見えになっていました。「これは本当に画期的！」一会場にいた建築士さんはみなさんロを揃えてそうおっしゃっていました。

「外国産材や薬剤注入したものはたくさんある。でも自然の木、そのままのものはなかった。東京では延焼のおそれのある素材は使いたくても使うことができなかったので、認定が取れればニーズは確実にある。間違いなく普及するでしょう。山の整備のために切らなきゃいけない木がたくさんあるから、今回の取り組みには非常に期待しています」(試験を見学に来た設計士)。

薬剤を使わずに、薬剤処理したものと同じ防火性能を確保するためのポイントは“燃えしろ”設計（一定の厚みを持たせる)。輸入木製サッシに詳しい青木社長は、防火窓の認定を受けている木製サッシからそのヒントを得たそうです。もう一つのポイントは比重。木は中の繊維によって重さと密度が違い、一般的には密度が重いほど燃えにくいそうですが、その点、カラマツは重い木なので適しています。

素材の特性を活かし、一定の厚みを取ることで、試験は成功。今後は製造を受け持つ小林木材㈱さん（小県郡長和町和田4336- １、小林基英社長）と共に販売会社を設立し、全国に拡販していくそうです。

これに留まらず、21年度は、地域住宅モデル普及推進事業に、「ふるさと信州環の住まい」モデル住宅事業等で４件採択されている他、地域木造住宅市場活性化推進事業にも２事業が採択されています。

●無ければつくればいい●

高橋　なぜ、設計事務所が建材の開発を？

社長　要するに、ぼくが使えるから。ぼくの設計に必要なものだからやりたいんです。自分が使いたいものが無ければつくればいいってことなんですよ。

カラマツサイディングをやろうと思ったのは５年前。以前は米杉などを使っていましたが、その頃から質が落ちてきたんです。米杉は「レッドシーダー」の名の通り、赤い木なんですけど、白っぽい木になってきたんですね。というのも、北米の木材業界にとって、中国や中東と言ったいい市場ができてきたからなんです。日本は神経質で“Jグレード”が求められるけど中国や中東はそんなのおかまいなし。その方が楽だから、中国や中東にどんどん流れていったんですね。それで日本にはいい材が入りにくくなった。その結果、希少価値の高い木ということになって値段も上がってしまったんです。

それで、カラマツでやろうかって考えて、構造材を仕入れている小林木材さんと組んでやり始めたんです。ただ、ロット数がいっぱい出ないと価格も安定しないし質も安定しない。質のいいものだけをオーダーするといい木を選木しなきゃいけないから高くなっちゃう。値段をある程度に抑えながらトータル的に質をよくしようと思ったら、量を出さないといけないんですよ。それじゃあ量を増やそうということで、自分で使う分だけじゃなく、流通に乗せようということになったんです。で、米杉のサイディングを扱う横浜の会社や、ぼくも参加している東京の建築グループ、「アーキテクツデスク」って会で紹介したりして徐々に販路の開拓ができてきたんです。

でも、もっともっと販路を開拓して行かなきゃいけない。そのためには何が必要か…。みんな「木は火に弱いだろう」と思う。そこで防火構造・準防火構造の認定を取ることにしたんです。

●長野県の財産で外貨を稼ぐ●

社長　でも、まだまだ長野県の木材には可能性があります。なので、今度は信州赤松の構造材、内装材、家具建具の普及事業や信州カラマツのロングスパン工法、２×４材の開発などに着手しています（「信州産マツ系（アカマツ・カラマツ）高耐久構造材開発に関する事業」として21年度地域木造住宅市場活性化推進事業採択）。

長野県って県外から外貨を稼ぐよりも出しちゃってる部分が多いと思うんですよ。蓄えられていない。外からお金をもってくることを考えなきゃいけない。ぼくは木材のことしかやっていませんが、長野県内の財産に目を向けてみれば、外貨を稼ぐことができるものはまだまだ一杯あると思います。

研究開発は今がチャンスです。景気のいい時は実際の業務の方が忙しくなっちゃって、研究開発なんてやる暇なくなっちゃいますからね。

（次週へ続く）

■信州カラマツ外壁サイディング

薬剤処理を施さない無垢材のサイディング。縦張り２種類（チャンネル／合いじゃくり、ボードアンドバテン／重ね張り）、木材用保護塗料の塗布可能。木造軸組工法、木造枠組壁工法に対応。

㈲和建築設計事務所
塩尻市広丘高出西原1955－３
TEL0263－51－0318
FAX0263－51－5352　和建築設計事務所　検索

小林木材㈱
小県郡長和町4336－１
TEL0268－88－2007
FAX0268－88－2423　小林木材　検索

㈲和建築設計事務所

小林木材㈱

経営者リレーインタビュー PART2

わがまちのリーダーたち NO.31

有限会社和建築設計事務所
青木　和壽　社長

カラマツサイディングを使用したお宅。

後編　あらゆるものがデザインだ！

無いならつくればいい一。言葉にしてしまえば当たり前です。しかし、現実は目の前の仕事に追われるあまり、既定の枠の中でしかものを考えられなくなって、“無い”ことにさえ気づかなかったりするのかもしれません…。

●あらゆるものがデザイン●

高橋　“無い”ということに気付くことがまず難しいですね…。

社長　「自分の得意分野がなんなのか？」ってことが分かっているかどうかということですね、多分。自分が何をやれば他と差別化ができるのか…。設計業界って、変な言い方すると、最初の出発点は“パクリ”の世界なんです。著名な設計士の方々も、ヨーロッパなど海外を見に行って、そこで感じた要素を自分なりにアレンジしていったわけです。最初はみんなそういうところからスタートする。でも、独自性を出さなければいけないから、常に何か課題をもって、「もっとこれやりたい」ってものを持つ。そして自分のやりたいことをやる環境を整える上で必要なものが無ければ、それをつくるってことなんですよ。

こうした一連のプロセスがデザインなんです。以前勤務していた事務所で言われたんです。「デザインってのは、かっこいい家を描くことだけじゃない」と。英語のarchitectureって言葉は、単純に「建築」という意味だけじゃなく、“無”の中から有形のものを構築していくデザインなんです。

だからあらゆるものがデザイン。会社をつくるとすれば、会社をつくりあげること自体がデザイン。だから他の設計事務所の方から見て、「建材開発なんて設計の業務じゃない」って思うかもしれないけど、ぼくにしてみるとデザインなんですね。家をデザインする時、何もない白紙の上から始まります。それに線を書くことによって、形状が見えてきて、具体化されてくるわけですよね。それと同じなんです。

●長野県にいるからできる●

高橋　それにしても、先日の防火構造の試験を見ても、東京の設計事務所さんの方が自然素材とか環境ということに関心が高いのかなって気がしました。

社長　そうですね。東京の方が敏感ですよね。

高橋　そうすると、青木社長もずっと東京でお仕事されていた方がよかったのでは…？（笑）

社長　確かに東京にいる方がいい部分もあるか

も知れません。でもこっちに帰ってきて、カラマツを見て、触って、材木屋さんとしょっちゅう会って話をすることができたから、今回のカラマツサイディングのようなことができたのかなと…。東京にいたらできなかったと思います。

高橋　今はインターネットであらゆる情報が手に入りそうですが…。

社長　やっぱりそれでは分からないところがあるんですね。図面を描いたりすることはインターネットなんかでもできるけど、生きているものは、その場で実際に触ってみたり、においを嗅いでみたり、使ってみないと分からないんです。

やっぱり木も生きているものなので、こちらの思いが伝わるような気がします。思いを込めて取り組めば、不思議と木も協力してくれるって感じています。なので、最近は手入れの行き届いていないカラマツの山林なんかを見かけると、「今になんとかしてやるぞ」って心の中で語りかけています。

●家は社会的な資産●

社長　それと、こっちに帰ってきたのはもう一つ理由があります。長野県ってハウスメーカーのシェアがすごく高い県なんです。ということは、逆にチャンスもたくさんあると思ったんです。「ハウスメーカーがやっている1,000棟のうちの10棟でいい」と考えれば…。

それに今、住宅業界は枠組の大きな転換点に来ていると思います。量から質の段階になってきているんです。

昭和のオリンピックが始まる前、国は、住宅を安定供給するために、ハウスメーカーをつくりあげて全国展開するシステムを推し進めました。しかし、もはやその大量安定供給の時代は終わり、次は質。役者がちゃんと見える家づくりをしようという段階になっている。国交省の「地域木材活性化推進事業」なんていうのも、まさにその流れの中にあるわけです。

しかし、40年という大量安定供給の時代が長すぎた。だからこの枠組の転換は大変難しいことです。40年って言ったら、一世代を超えちゃっているわけですよ。ようは40年前生れた子供が家を建てる世代になっているということ。ということは、その40代のお施主さんは、お父さん、お母さんが大量安定供給の中でやった家づくりを見て、「これが家づくりだ」と思っちゃってるわけです。住宅展示場見てそこで決める。それが家づくりだと思っている。

家をつくるってことは、本来、個人の資産をつくることじゃないんです。社会的な資産をつくるってことなんです。景観的にも、エネルギー問題に関しても…。そういうふうに捉えて、「こういう家つくっていいんだろうか？」って、まず考えて欲しいですね。

（終わり）

青木社長がご紹介くださるのは、㈱住まい工房の中島崇伸社長です。「私がこちらに帰って来た時からお付き合いさせて頂いています。“工務店のおやじ”という感じではなく、しっかりしたビジョンをもっておられ、いろいろ先進的なことにチャレンジしている方です。それでいて、もともと大工さんなので、ちゃんと根底も分かっておられます。この地域では飛び抜けた方ですね。今後、躍進するんじゃないかと期待しています」

次回（６月22日号）は、㈲ターバン・久保竹志社長です。

＜インタビューを終えて＞あらゆるものがデザイン―。設計業務だけをデザインだと思っている方には、建材の開発なんて思いもつかないんだと思います。「デザイン」というものをどう捉えるかによって、やるべき仕事の幅が全く変わってしまう、ということなんですね。ＴＳＲは情報を売っているわけですが、今までご提供してきたのは「既に情報となっているけど多くの人が知らないこと」（会社の概要や決算数字）が殆どだったと思います。もちろん興信所として、これからもその本業に変わりはありません。しかし、それに加えて、これからは「情報をデザインする」という発想も必要だと感じました。それは、「情報の素」を発掘し、それを自分たちの信念やアイデアで加工し、新しい「情報」を創り出すことだと思います。（高橋：平成18年６月松本支店入社）

ご感想お寄せください。fumiki.takahashi@tsr-net.co.jp